

第4回山形県総合教育会議議事録

1 場 所 山形県庁舎 1001 会議室

2 日 時 平成 28 年 10 月 31 日 (月)

3 出席者

知 事 吉村 美栄子

山形県教育委員会

教育長 廣瀬 渉

委 員 涌井 朋子

委 員 武田 靖子

委 員 片桐 晃子

委 員 山川 孝

委 員 森岡 雄一

4 協議事項

学力向上に向けた家庭教育の充実について

5 議事の経過

司会：教育庁総務課副主幹

開 会

それではただ今から、第4回山形県総合教育会議を開催いたします。
開催に当たりまして、吉村知事より御挨拶をお願いいたします。

吉村知事

委員の皆様、大変お忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。
ございます。

さて、今年7月に「第3回山形県総合教育会議」を開催したわけですが、
そのときは、グローバル人材の育成について協議をいたしました。

委員の皆様と活発な意見交換をさせていただき、郷土に誇りを持ち、海
外に対してしっかりと情報発信できる子ども達を育てていくという方向性
を共有することができたと考えています。

さて、今年2回目となる本日ですが、学力向上に向けた家庭教育の充実
について協議をさせていただきたいと思えます。

総合教育会議で学力向上を取り上げるのは、昨年の9月に続き2度目と
なります。

先月「平成28年度全国学力・学習状況調査」が発表されたわけですが、
その結果をみますと、課題でありました「活用する力」をみる「B問題」
の正答率が向上していました。改善に向けた取組みの成果が出ていると捉
えているところですが、ただ、小中学校ともに全国平均を下回る教科が少
なくない状況であります。この結果を真摯に受け止めて、学力向上に向け

た取組みをしっかりと進めていかなければならないと思っているところで
す。

また、子ども達の学力向上を図るためには、学校の勉強だけではなく、
家庭での学習習慣というものをしっかりと身に付けさせることが極めて重
要だと考えています。

そこで本日は、家庭における学習習慣や生活習慣の改善について、委員
の皆様方から御意見を頂戴して、その方向性を共有したいと思っています。

全国学力・学習状況調査結果なども踏まえながら、教育委員の皆様と忌
憚のない意見交換を行いたいと考えていますのでよろしくお願いいたしま
す。限られた時間ではございますが、実り多いものとなりますようお願い
申し上げます、私からのあいさつといたします。

どうぞよろしくお願いいたします。

協 議

それでは協議に入りたいと思います。

なお、本日の会議ですが、2時半までを予定としています。御協力をよ
ろしくお願いいたします。

それでは、ここからの座長は、吉村知事にお願いしたいと思います。で
は、よろしくお願いいたします。

吉村知事

それでは、暫時の間座長を務めさせていただきますので、御協力よろし
くお願いいたします。

では、資料について事務局から説明してください。

総務課長

まず、資料1「平成28年度 全国学力・学習状況調査結果について」を
ご覧ください。

はじめに、「1. 学力調査結果の経年変化」のグラフです。28年度の結果
につきまして、先ほど知事からもお話がありましたが、全国の平均正答率
との比較を、小学校、中学校あわせてみますと、中学校の国語A、Bは本
県が上回ったものの、それ以外は全国平均を下回る結果となりました。

ただ、これまで課題としていましたB問題（活用問題）については、改
善が見られたところです。

その下の「2. 学力調査結果と学習状況調査の関連」です。国語や算数、
数学を好きな子ほど、正答率が高い傾向を見て取ることができます。「好き
だから分かる」「分かるから好きだ」のように、興味・関心と内容理解が相
互に作用し合う授業を展開していくために、興味・関心を喚起する教材の
開発や主体的に取り組める学習活動の充実などを図っていく必要があると
考えています。

次に「3. 学習状況調査の結果」です。これは、児童・生徒自身の学校

や家庭生活に関わることを子ども達に尋ねたものです。

まず表の上段ですが、読書への興味を示した児童・生徒の割合が、小・中ともに昨年度より増えていますし、全国平均も上回っています。

次の家庭学習（塾等を含む）につきましても、1時間以上取り組む児童・生徒の割合（この表でいうと「1h以上2h未満」と「2h以上」の数値を足したもの）は、小学校が72.1%、中学校が70.7%で、全国平均を上回っていますが、2時間以上学習する児童・生徒の割合は、全国よりも低い状況にあります。

また、「4 TV視聴」になりますが、テレビを見る時間が2時間以上の児童・生徒が、小・中ともに全国平均を上回っているという状況にあります。

次に下段の表ですが、自尊感情、思いやり、規範意識等重点としている全ての項目で全国平均を上回っています。特に、自分が住んでいる地域行事への参加状況を示す「4 地域とのつながり」については、小・中ともに、全国平均を大きく上回っている状況です。

次に「4. 結果分析を受けての今後の対策」です。

「探究型学習の推進」、「教員の指導力向上」、「児童・生徒の日常的な学習の充実」と大きく3つに分けて整理しています。

「探究型学習の推進」では、推進協力校による実践研究と成果の発信、山形県学力等調査を生かしたPDCAサイクルによる評価・改善システムの構築等を図ってまいります。

また、「教員の指導力向上」では、教育マイスター制度による研修リーダーの育成や先進県への教員派遣研修等を実施してまいります。

また、本日の協議テーマであります学力向上に向けた家庭教育の充実に関連した「児童・生徒の日常的な学習の充実」としまして、本県教育委員会作成の「単元末評価シート」や「スパイス問題シート」などを活用した発展学習や補充学習の工夫、また、家庭学習の重要性の啓発、規則正しい生活リズムや学習習慣の確立などにしっかり取り組んでいきたいと考えています。

続きまして、資料2をご覧くださいと思います。

上段には、家庭における子どもの実態といたしまして、先ほど申し上げましたテレビ等の視聴時間の本県の子どもの状況と、生活習慣の乱れからくる学習意欲の低下等の懸念について。また、親の実態として、昨年アンケート結果から見た親の不安や悩みの状況と考えられる要因等について整理しています。中段になりますが、課題解決の方向性として、学校では、子どもの行動様式の改善に向けて、家庭との連携による、子ども自身が生活習慣を見直すきっかけ作りを。家庭では、大人の課題意識の醸成に向けて、家庭に対する学び・気付きの場の提供と充実を。地域では、県全体の

機運の醸成に向けて、地域による家庭教育支援の推進を、それぞれ図っていくこととしています。

具体的な推進策につきましては、やまがた子どもの生活リズム向上プランといたしまして、学校では、PTA活動による子どもの生活習慣改善活動の実施等を。家庭では、保護者の意識や生活スタイルの改善、親と子が共に学ぶ様々な体験活動の提供などを。地域では、地域人材による家庭教育支援の推進やフォーラムの開催を通じた全県的な展開などを実施してまいりたいと考えています。

続きまして、参考資料として「学力・学習状況調査結果の概要について」という資料を付けさせていただきます。今年度の調査結果から、生活習慣に関する調査項目のうち「朝食の摂取」「読書・新聞の購読」「テレビ・テレビゲーム・スマートフォン等の視聴・使用時間」と、成績の上位層・下位層との関連について取りまとめてみたところです。

この中で、上位層・下位層といたしますのは、「2 調査結果の概要」にもありますが、児童・生徒の正答率を大きい順に並べ、人数比率により25%ずつ4つの層に分けたとき、その上位25%を「上位層」、下位25%を「下位層」としています。

状況を簡潔に申し上げますと、1ページから2ページにかけてですが、朝食を毎日食べている児童・生徒、普段読書を行っている児童・生徒、それからほぼ毎日新聞を読んでいる児童・生徒の割合は、上位層の方が下位層よりも高い状況にあります。また3ページ目になりますが、テレビゲームを行う時間、スマートフォンを使う時間が、特に2時間以上の児童・生徒の割合は、下位層が上位層を大きく上回っているなどといった結果となっています。

資料の説明は以上です。

吉村知事

ただ今事務局から説明ありました。御質問があれば、後ほど、御発言の中でお願ひしたいと思ひます。

それでは、早速、家庭教育の充実について協議をしていきたくと思ひます。皆様、できるだけ5分程度でお願ひしたいと思ひます。

では、はじめに涌井委員から発言をお願ひいたします。

涌井委員

子ども達の学力向上において、家庭での学習が大切であるということは、従来から指摘されている点であり、今回の全国学力・学習状況調査の結果を見ても、毎年の傾向は、依然大まかなところでは変わっていないのだなと感じました。

山形県はテレビの視聴時間が長いということなのですが、このことについて私は、多少違った見方もあるのかなと感じています。と言ひますのも、例えば、都市部や比較的経済的に余力のある家庭の子ども達は放課後の塾

通いが日常でありまして、テレビを視聴する絶対的な時間がないという要因があって、故にその割合が多い都道府県ほど、家庭でのテレビ視聴時間が短くなっているのではないかなと感じています。

私は新庄市在住なのですが、塾が市内にそれほど多くないということと、塾に毎日通うほど余力のある家庭がどれだけあるのかなということを感じています。

物理的に塾通いが難しい地域に住んでいる子ども達や経済的余裕のない家庭、また、共働きやダブル就労などで保護者が日常忙しくて子どもの学習をなかなか見てあげられない家庭では、家庭学習が大切だということを実感しながらも手を掛けてあげることができず悩んでいる家庭も相当あるのではないのかなと思います。

親が忙しくて日頃一人の時間が長い子ども達は、家庭で学習に向かう意欲が育ちにくいのではないのでしょうか。子どもの貧困率とテレビ視聴時間との関係についても、私は非常に興味を持っています。

そのような状況下の子ども達や家庭には、行政や社会での支援が不可欠ではないかと考えます。既に本県をはじめとして、色々な支援や取組みがなされていますが、そういった支援について、各家庭に周知徹底、認知していただき、どんどん活用してもらおうような取組みも、施策を考えることと同じぐらい重要なのではないかなと感じています。

子どもの貧困については、非正規雇用の拡大や、ひとり親家庭の増加が大きな要因であると言われていますが、社会的・経済的格差が、教育格差に結びついているような現在の状況は、本当に何とかしなければならないと思っています。

格差がもたらす負の連鎖を断ち切るには、やはり学校や行政だけでは限界があり、地域を巻き込んで社会全体で取り組んでいかなくてはならないと心から感じています。現在の様々な取組みを維持発展させることはもちろん、地域の人材や力を借りて仲立ちするには、もっともっと開かれた学校づくりをしていくという視点も必要だと思います。

格差に関わらず、子どもの未来と可能性を全ての子ども達に等しく与えられるような教育を、他県に先駆けて、ここ山形県で是非実現していただきたいと考えています。

吉村知事

ありがとうございました。
時計回りでいきます。
次に武田委員お願いします。

武田委員

学力にポイントを絞ってお話させていただきたいと思います。
これからの時代に求められる学力というものが、そもそも一昔前と違っているという認識が、家庭においても必要だと考えています。そして、以前にも増して、家庭教育や生活習慣が学力に直結する時代になっていると

言っても過言ではないと、私は考えています。

どういうことかと言いますと、丸暗記でできるだけ多くのことを頭に詰め込むという学力ではなくて、自分で考えて自分で学んで周囲の人と力を合わせて結果を導くという、アクティブ・ラーニングや探究型学習が、これからの社会を生き抜くのに必要な力だと言われています。主体的に学ぶ力がつくことの結果として、知識が定着して、学習への意欲が向上する。親も丸暗記や詰め込み型の勉強は時代遅れなのだと認識すべきなのではないかと感じています。

大学入試改革や教育改革など、大きな変化の波が押し寄せているわけですが、一般の家庭では、まだそのような変化は認識されていないと思います。それをどう認識してもらうか、意識を育てるかということも大事なのではないかと思います。

では、そういう子どもをどのように育てたらよいかということですが、望ましいのはやはり自分でやる子ども、言われたことをただやるのではなくて、自分で判断して行動できる。小さい頃から家庭生活においても主体性を育むということがキーワードになると思います。

子どもの能力を伸ばして賢く育てたいというのは、どこの親も一緒だと思いますが、学校や塾だけではなくて、特に大きな影響を与えるのは家庭になってくると思います。主体的に考える、日々の過ごし方を家族で話し合っただけで決めたり、普段の生活の中で疑問に思ったことを調べる、確かめるなど、具体的な行動に結びつくように親も考えて、子どもに接する必要があるのかと考えます。

知りたい、学びたいという好奇心を持つことで、自然に学力がついてくる。頭がいい、賢いというのは、点数がいいだけではなくて、好奇心が強い。そういう子どもを育てるということが、家庭教育において大事なのではないかと考えます。

その反対が受け身ということなのですが、先ほど山形県の子どもの実態にありましたテレビについて、テレビを見放しというのは子どもの積極性を奪うものだと言われている側面もあります。目的を持って見るならいいのですが、生活習慣としては、どんなときもテレビを消さないとか、見ることもなしに眺めている、何も感じることなく自動的に見ているというのは問題なのではないかと思います。

子どもにとって良質な番組には、感動したり好奇心を掻き立てられたり、社会に関心を広げさせるような、いい側面もありますが、そこは親が主体的になって子どもを導くとか、見守って環境を整えてあげることが大事なのではないかと考えます。

あとは朝食をきちんと摂る子と摂らない子の学力差というのは、世界の色々な機関で証明されていることですし、睡眠時間をはじめ、家庭で、子どもの学習環境につながるコンディションを整えてあげることが大事だと思っています。

将来を自分で切り開ける子どもになって欲しい。自分でやる力、主体性を育てることと、放っておくこととは違うので、親が成り行き任せにしないことも大事です。そのためには今回の学習状況調査のデータを参考に、分かり易く、望ましい生活習慣について情報発信することが大事なのではないかと考えています。

吉村知事

ありがとうございました。
では、山川委員お願いします。

山川委員

今回の学習状況調査の結果を見てすぐ目に付くのが、「山形県の子ども達はこんなにたくさんテレビを見ていたんだ。」というのと学力調査の結果なのですが、色々頑張っているけれども学力調査の結果は少し低迷気味かなという印象を受けます。

それから、思いやりのある子ども、あるいは地域とのつながりをきちんと持っている子どもが多い、こういうところもすぐに目に付きます。

子どもの生活習慣の乱れが指摘される際には、一方で子どもの非行問題があるということもあるわけですが、山形の場合は、全国的に見て少年非行は非常に少ない。おそらく家庭の倫理的な教育機能であるとか、保護的な機能というのは、かなりの程度に発揮されているのだろうなという印象を持ちます。

ただ、学習面ではどうなのだろうというところはあるわけです。それで、何故こんなにテレビを見ているのか私なりに考えてみました。

山形県の家庭の全国的な特徴というところ、3世代の同居家族が多くて共働き家庭が多い。おじいちゃん、おばあちゃんがずっと家に居て、子どもが帰ってきて、そうすると、おじいちゃん、おばあちゃんはずっとテレビを付けっ放しにして過ごしている。それを何気なく見ていて、勉強するときも見ながらやっている。そういうこともあるのかなと思います。だから共働きの家庭であったり、同居家族が多いというのは、倫理的、教育的な面では非常にいい面が出ているけれど、学習面ではまた別の面が出ているのかもしれないなという印象を持つときがあります。

家庭教育の充実ということを考えると、今山形県が目指している探究型学習というものを、我々も経験したことがないですし、特に親の世代、それ以上の世代では全くそういうのが分からない。ですから、おじいちゃん、おばあちゃんも含めて、啓蒙活動のようなものも必要なのかなと思います。

それから、山形では地域とのつながりをきちんと持っている子ども達が非常に多いということであれば、おじいちゃん、おばあちゃんにも参加してもらおうような形の教育の環境、学習の場を整えるということも非常に重要だなと考えています。

吉村知事

ありがとうございました。

それでは森岡委員お願いします。

私は、第6次山形県教育振興計画の策定に少し携わらせていただいたということもありまして、今回の全国学力テストの成績と総合的な学力とは、また違った側面で見してみる必要があるのではないかと考えています。

6教振では、学力の定義を「社会を生きぬく基盤となる確かな学力」と位置付けてあったと思います。そういった意味では、山形県が継続して行ってきました「教育山形さんさんプラン」は、全国のモデルケースとなるような素晴らしい成果をあげているのではないかなと、私は解釈しています。

私どもの会社は、仙台市内にも事業所がありまして、先般、そこの社員で、PTAの副会長をしているお母さんと面談をしておりまして。何気ない仕事の話の最後に、「山形ってすごいですね。」と言うので何故か尋ねると、先日PTAと先生方の会議があったときに、「山形では、さんさんプランの流れを受けて探究型学習というのが全国トップクラスで進んでいて、素晴らしい成果をあげているそうだ。」と話していたと。これは、私達が隣の県の学力テストの成績がすごいねと思うのとは、もしかしたら少し違う認識をお持ちではないかと感じたところです。

資料1の2に整理していただいたように、子ども達が各学科、学習科目に好奇心を持ったり、好きになるきっかけを作る。子ども達は一人ひとり違った才能を持っていて、先生方が様々な教育技術を駆使して、子ども達の光る部分を引き上げてあげる。このところが中長期的に見た学力向上の基本的な施策だと思いますし、私はこれが王道だと思います。

今回の全国学力テストの成績というのは、これまで山形県がやってきた様々な教育実績の傾向ということであって、これまでの県の様々な施策の評価や結果が、このテスト成績への反映ではないだろうと、私は見ているところです。

ですから、現在も推し進めております山形県の6教振に基づく施策というものを、これからもひたひたと積み上げていくことが、子ども達の学力向上の一番の基礎となるものではないかなと、そう考えています。

そして、子ども達の環境についてですが、これは親の仕事であったり、地域の経済というものと、様々な関連があるのかなと思います。

例えば名古屋近郊などは、産業が非常に集積していて、お父さん、お母さんの就労場所も大変多くある。逆に地方都市は、地方に立地した大きな企業が、海外に転出したり事業所を集約したりしていますので、お父さん、お母さんの経済環境、生活環境が大変大きく異なっている。

そうした中で、県内における子ども達の非行やいじめ等の様々な数値は、全国の伸び率に対して非常に低いのではないかなと、私は思います。

これはやはり、山形の、さんさんプランも含めた、これまでの教育の積上げが活きているのだと思います。是非こういったところを、メディアの

方にもしっかりとアピールしていきながら、子ども達や日々現場で頑張っている先生方を励ましていくような流れを作っていきたいものだなと考えているところです。

吉村知事

ありがとうございました。
それでは、片桐委員お願いします。

片桐委員

私は県の家庭教育アドバイザーの役目をいただいております。小学校の就学時健診時の保護者への講話であるとか、企業に出向いて行う出前講座の講師などもさせていただいています。

そのときに必ずお話しするのが、「早寝・早起き・朝ごはん」というテーマをひとつ掲げまして、生活リズムがいかに大事かということです。近年では子供の生活リズム、特に就寝の時間が遅くなってきていることが調査で分かっているようで、それに伴って、朝起きられない、ご飯を食べたくない、学校で眠いとか、そういうことが起こっているということです。

保護者向けの研修会などでは、「子どもの生活リズムと睡眠」であるとか、「脳や体は眠ることで作られる」ということをテーマにした研修なども行っています。

出前講座をやっていると、親の悩みを色々聞くのですが、特に多いのが、子どもと接する時間をなかなかとれない、忙しくてついついコミュニケーションが不足してしまい子どもがどんなことを考えているか分からない、どこでどういう勉強をしているのか掴めていないという悩みで、涙ながらに私に訴えてくる保護者もいます。ということは、保護者が、自分自身の悩みであるとか家の中のごたごたを吐き出す場がないのではないかということ、すごく感じました。

担任の先生に色々相談なさっている保護者もいますが、保護者自身の抱えている問題はとても大きい。また、3世代同居というのとはとてもいいことのように語られていて、いいことももちろんあるのですが、一方でおじいちゃん、おばあちゃんとの悩みというのも実はありまして、教育観の違いがあって困っているというお母さんもいるなど、3世代同居ならではの悩みもあるんだなと感じています。

もう一つ、私が酒田市でやっている「子育て広場」では、「赤ちゃん登校日」ということで、広場に集う赤ちゃんとお母さんを連れて学校を訪問して「ふれあい講座」というのをやっています。

あちこちの中学校や小学校を回っていると、先生も、生徒も、事務の方も、外部の私が廊下を歩いていると、「おはようございます。」とか「こんにちわ。」とか、すごく元気に声をかけてくれるのです。

温かい学校づくりがなされているのだなと感じて、いつもとても温かい気持ちで帰ってくるのですが、そういった意味では、家庭教育の充実が必要だとはいっても、しっかりなされている家庭もたくさんあるなと嬉しく

思っているところです。

最後。家庭教育といいましても世帯も様々です。

3世代同居も多いけれど、近居といいまして、近くにおじいちゃん、おばあちゃんがいて、学校が終わるとおじいちゃん、おばあちゃんの家に行く子どもも最近増えてきました。また、放課後子ども教室や学童保育に行っている子どももすごく増えていますので、そういう問題もこれからどうしていくか、学校から下校したときからの子どもの過ごし方という面も、色々考えるところはあるのかなと日頃感じています。

大変ありがとうございました。

皆様からひと通り御発言を頂戴しました。私からも一言発言させていただきます。

私は以前から、学力向上のためには、まず基本となる生活習慣をしっかりと身に付けることが大事だと申し上げてきました。

お話にもありましたが、朝きちんと起きて、挨拶もして、ご飯を食べて、そして睡眠をとる。当たり前の生活を身に付けるということがまず大事かなと思っています。

福井県は随分前から学力が全国のトップクラスでしたが、知事にお聞きしますと、あそこは3世代同居率が全国2位くらいで、共働き率もとても高かったと思いますが、家庭での学習習慣が当たり前になっているようで、社会的にといいますか家庭も協力体制が良くできているようです。

ほかの委員の皆様からも出ましたが、共働き率が全国1位というのは、親のいない時間帯があるというわけで、そういった家庭の生活習慣をどうやって改善するかということも、本当に大きな重要な課題だと思います。

3世代同居率全国1位で、マイナス面とプラス面の両方あるという話は私も良く分かりますが、その良さを生かした取り組みというのを進めていくのが大事で、課題をどうやって克服するか、地域での取り組みでサポートするというようなことも本当に大事なのではないかなと思っています。

共働きでしたり、また貧困という言葉が出ましたが、本当に色々な家庭がありますので、家族の力だけではなかなかできないという家庭に対して、地域社会でどういうことをやっていけるのか、家庭教育をしっかりと支えて補うという視点が大事ではないかなと思っています。

ここで一旦、これまでの皆様の御発言を整理させていただきます。

皆様方から、「家庭教育は探究型学習をはじめとする学力向上の取組みのベースとなるものである」ということ、「勉強への好奇心や好きになる気持ちを育てることが大事だ」ということもありました。また、「基本的な生活習慣を身に付けさせることが大事である」、そして「家庭教育改善の動機付けとなるような情報発信が重要である」などの御発言も頂戴したところで

山川委員

ここからは、学校や家庭において、子ども達が興味と関心を持って集中して勉強できるようにするために、家族はどのように関わっていく必要があるか。また、家庭教育が何故重要なのか各家庭にしっかりと伝えて行動に移してもらうためには、県としてどのような取組みが必要かといったことについて、議論を深めていただければと思いますので、順序は決めませんので、どのようなことでもよろしいので委員の皆様から御発言をお願いしたいと思います。

今回の調査の結果は、学力テストの結果と学習状況調査の結果とが統計的にあげられています。学力の向上というのは、学力テストだけで測られるわけではもちろんないのですが、意識するしないに関わらず、資料として出てくるとどうしてもそちらの方に目がいってしまうということがあります。

私も、山形県が行っている探究型学習というのは素晴らしいと思っています。ただ、一般のお母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、地域の人も含めてですが、この探究型学習というのはどういうものなのか、具体的にどんな内容でどうやって進めていくのかということについては、まだあまり知られていないのではないかという気がしています。正直なところ、私も名前としてはもちろん聞いたことはありましたが、そんなに詰めて考えてみたことはありませんでした。

それで、学力テストや山形県が独自実施している学力調査との関係について考えてみると、非常に成績が良い隣県では、試験に向けた対策をやっているのではないかと思います。

山形県では、テストの点数だけに目が向いてしまうのは問題ではないかということで、おそらくそこまでやっていないのだと思いますが、少し視点を変えてみると、施策を実施してそれをどういう形で検証するかというときに、テストは一つの検証材料であり、そこで行われるテストの中身とか、あるいは結論に至るまでの過程というのが、探究型学習の成果をみるという意味では、一つの目安にはなり得ると思います。

というのは、一般の父母の方たちは、おそらく、新聞で学力テストの問題と解説を見てはいても、それがどういうことなのかということまでしっかりと把握はしていないのではないかと思います。

単に学力テストの点数を上げればよいということではない、目的と手段が違うということは重々分かっています。

ただ、子ども達にはもちろんですが、父兄達にも「今回の学力テストで問われているのはこういうことなんだ。」「こういう解答を出すまでにはこういう思考過程を通ってきて、こういうふうにするんだ。」ということを、色々な機会に説明して、今山形県が目指している探究型学習でも、「こういう問題であればこういう解き方でいけばこういう解答が出る」ということを、もう少し具体的に、目に見える形で対策をとってもいいような気がし

ています。

隣の県の成績がいいから同じようにテスト対策をやればいいと言っているわけではないのですが、やはりやった方がいいのではないかと、私は思っています。試験対策ということではなく、勉強の成果をみる、その後の政策に活かす、勉強方法に活かすということで作る。

あの問題を私は見ましたが、私達が勉強して来た時代とは違って、一つひとつきちんと問題抽出して、そこから情報を得て、解決までというものになっているので、「なるほど。今はこういう方向に学校の教育は動いているんだな。」と、初めて気付かされるんです。

そういうところがあるので、誤解を恐れずに申し上げましたが、きちんと対策をとることの意味というのは、やはりあるのではないかと、個人的には思っています。

吉村知事

ありがとうございました。

では、武田委員お願いします。

武田委員

私自身も本当に子どもと接する時間がない日々を送っておりまして、上は高校生で手が掛からないですが、下が5歳ということで、時間がない中で、量ではなくて、どうやって質という部分を考えていくかとなったときに、学力とか自分から勉強するという意欲に結びつくような興味、関心、好奇心を育てるためには何をしてあげたらいいのかと常日頃考えます。視野を広げてあげる、若しくは選択の幅を広げてあげる。

でも今はイベントバブルといわれている時代で、週末にお父さん、お母さんが子どもにさせていることというと、用意されたものを消費するような遊び方になっていないか、子育て支援施設や遊具に預けっ放しになっていないかと感じています。

そういった中、私はイグメン共和国というのをやっております、そのお父さん方の遊び方というのがすごく参考になっています。

それは、普通に散歩するだけでも、今の時期ですとたねを拾って観察したりとか、読み聞かせや一緒に本を読む、野山に出掛けてフィールドワーク、あとはお魚を一匹買ってさばいて料理をしたり。そういうことで、一緒に楽しんで、気付いて、感心するというような共感を得ることを経験させることが大事なのではと気付かされています。

父と子の料理教室でも、ただ料理をするだけではなくて、魚を観察しながらやるというような感じで、じっくり子どもと向き合って、子どもの興味関心をのびのびと育ててあげることが大事なのではないかと思えます。

そういうことがなかなかできない、時間がない、気付けない、どうしたらいいのか分からないお父さん、お母さんが多いということなのではないかと思えますので、資料2にも親の課題意識を醸成するとありますが、山形

県でのびのびと子育てしているような事例であるとか、そういったものが共有できないかと思っています。

秋田県の学力が高いのは、色々な対策が施されている結果でもあると思いますが、その中のひとつに、各家庭に貼ってある「杉っこ十か条」というものがあります。

早寝・早起き・朝ごはん、家庭学習は大事だよとか、ルールを守りましょうというような感じのものなのですが、こういったことが、家庭においても日常的に大事なものとして意識に刷り込まれるということも必要なかと思っています。忙しい最中であるならなおのこと、こういうものにぱっと気付いて自分の生活を見つめ直すということも大事だと考えます。

また、昨年度は、旧朝日村の朝日中学校を視察しました。

その中学校は驚くほど学力が高いそうですが、何故なのかというと、各家庭が、そもそも子どもは勉強するのが当たり前だという認識を持っている。このため、宿題の取組み、学習時間などに関する意識が高い。

こういうことの結果が表れているのかなと思います。地域と家庭における子どもに対する熱心な取組み、意識を醸成していくことが大事だと考えています。

あと、山形県では「家庭教育講座」ということで、企業に出張していただける講座も用意されていますので、弊社でも、忙しい親にとって何が必要なのかということを講演していただく予定です。企業も含めて社会一丸となって考えていけるようにしていきたいと考えています。

吉村知事

大変ありがとうございました。
涌井委員どうぞ。

涌井委員

先週の木曜日にあった文部科学省の発表で、山形県は、平成 27 年度に病気や不登校により長期欠席した小中学生の割合が全国で最も少なかったというとても嬉しいニュースがありました。これは、山形県では全国一学校を好きな子どもが多いということの意味しているのではないかと感じました。

このような、全国に誇れる山形県の良さというものを活かして、勉強が好きになる子ども達を育てるための取組みを、是非進めていかななくてはならないと思います。

最近本で読んだのですが、東北大学の加齢医学研究所の川島先生と横田助教、仙台市教育委員会が、2010 年から継続して7年間、市内の小・中・高校生約7万人に対して、学習意欲に関するアンケートを実施したということです。

そして、そのアンケートの結果、子ども達の脳のやる気スイッチを入れるにはどうしたらいいのかということが明らかになったと書かれていました。

様々な角度から質問をしていたようですが、その中から見えてきたこととして、子ども達は、「勉強して新しいことが分かるようになると楽しい」とか、「新しいことやわくわくするようなことを探しながらいつも勉強している」など、子ども達自身の内側から沸き上がってくる勉強に対する内発的動機付けが高い子どもほど学力が高いことが分かったそうです。

また、そういった、内発的動機付けが高くて、かつ、親から勉強しろと言われるなどの外発的動機付けが高い子どもよりも、勉強しろと言われていない子どもの方が、むしろ成績が良かったという驚くべき結果があったということでした。

学習に対する内発的動機付けと学力は相関関係にあり、成績が良くなるという点を探れる、私は勉強ができるんだという自己肯定感が高まる、新しいことを学びたい、新しい問題に挑戦したいという内発的動機付けが一層高まってますます学習に取り組むようになる。内発的動機付けの高い子どもには、そういった好循環が生まれているというのが、アンケートと、更には脳科学的な側面からも明らかになったということでした。

では、内発的動機付けを高めるためにはどうしたらいいのかということですが、子ども自身が勉強することに楽しみを見出したり、やりがいを感じるができるように、周りがサポートしていくことが非常に大切であると書かれていました。

学校や家庭でも、良い循環を作り出すための働きかけを行っていかねばならないということが分かったのですが、そういう良い循環を作り出すにはどうしたら良いかについては、どこの親御さんも悩むところだと思います。

そこで、冒頭にお話した、山形県は学校を好きな子が全国で一番多いというところにつながるのですが、学校に行くのが楽しいとか、学校に行って友達と会うことが楽しい、授業などで自分の考えを文章に書いたり説明するのが好きだといった、学校生活全般に対して非常に肯定的な捉え方をしている児童・生徒が多い、つまり学校が好きな子が多いという点で、山形県の子供達は、もうやる気スイッチの導火線のひとつが点いているのではないかと私は感じました。

今後は、その導火線の火を、今点いているものを消さないようにしながらも、その内発的動機付けをより高めるために、家庭での声掛けや見守り、そして先ほどの施策の紹介にもありましたが、学校において一人ひとりの子ども達への適切な課題提供など、細やかな教育を充実させていくような仕組みを作っていくなくてはならないのだろうと考えます。

一人でも多くの子ども達のやる気スイッチを点けてあげられるような取組みをぜひ期待したいと思います。

そういった仕組みづくりをするに当たって、家庭での声掛けや見守りについて、私も日々悩んでおりました、子どもにどう声掛けしたら宿題するかな、勉強するかなと、毎日悩んで葛藤を続けています。

私を含めて、現在子育てをしている親世代は、かつて「マニュアル世代」と言われたりして、マニュアル的なものがないと、自分で考えてもどう声掛けをしたらいいのかということなかなか出てこないような、そういった世代なのではないかという気もしています。

家庭学習全般についての対応について、声掛けの事例集とか、シチュエーションに応じた対応の仕方とかそういった、親御さん向け又はおじいちゃん、おばあちゃん向け、保護者の皆様向けの、マニュアル的なものを準備していくのも、もしかすると有効なのかなと感じたところです。

吉村知事

ありがとうございました。

そろそろお時間となってきました。

教育長はマニュアル世代ではない時代ではないのかなと思いますが、最後に廣瀬教育長御発言をお願いします。

廣瀬教育長

では簡潔に申し上げたいのですが、まずひとつは、県教育委員会の家庭教育の基本スタンスとしては、やはり家庭教育は各家庭が自主的に取り組むということが大前提だと思います。

我々の仕事は、その環境整備に努めること。これはやはり、家庭教育の中に直接行政が入っていくということではなくてということです。

そういうこともあって、現在取り組んでいるような施策というようなものには、詳しくは申し上げませんが、基本的には保護者の皆様の啓発、それから今年やっている親子体験塾のように親子で生活リズムを整えるといったことを体験的にやって、それを全県に先導的事業として普及させていくとか、そういうことをやっています。

次に、今大きな議論になっている家庭教育と学力との相関関係、エビデンスというものをどうするかということでもあります。

お示した資料で見ても、早起きとか読書とかそういったものはプラスの方向に行きますし、テレビとか睡眠不足とかそういったことはマイナスの方向に行くということは、相関関係として示されています。

また、涌井委員からもありましたように、仙台市の調査によれば、動機付けの方もそうなのですが、一般的な相関で申し上げますと、テレビ、携帯これはマイナスの相関が明らかに出ていますし、朝食、睡眠、家族とのコミュニケーション、これも大きな相関が出ています。

特に睡眠は、片桐委員からもありましたが、科学的に、勉強したあと寝ることによって知識が定着する、しかも長期に定着するということは、明確になっていますので、そういったところのエビデンスも、単に朝食がいいとか何とかいうだけではなくて、何故いいのかも含めて示していくことが非常に大事だと思っています。

それから、動機付けの方も、色々な御意見があったわけですが、仙台市の例で言いますと、自らやるのが一番いいに決まっているのですが、小学

生はどちらかというとなら強制すると一層悪い効果がある。中学生は一定程度将来のことが頭にあるので強制してもある程度聞くと。つまり年代によって対応の仕方もだいぶ違ってくるということも示されています。

ですので、一義的な方法というよりは子ども子どもに合った、あるいは家庭家庭にあったやり方を、我々はあくまでエビデンスを示しながら取り組んでいただくことが最もいいのではないかと思います。

それから、探究型学習であります。

これは、山川委員がおっしゃるとおりで、去年から本格的にやっているわけですが、十分その内容が県民の皆様に御理解いただけていないということは承知しております。

そういうこともあって、県独自学力テストの問題自体を使って、要するに過去問の勉強ではなくて、それを使って思考のパターン、思考のやり方というものを勉強してもらおうということを考えています。ここにご父兄の方々がどうやって入っていくかというのは非常に難しい問題ですが、まず子ども達からそういった形で、ひとつの探究型という公式があるわけではなくて、主体的協働的な自主的な学びというもの、そのやり方を、こういうやり方があるんだ、こういう問題を解くときにどういうやり方があるんだということをしつかりお示ししていきたいと思っています。

あと大きな流れとして申し上げますと、家庭・地域・学校の連携であります。

この必要性はもう知事からありましたが、教育再生実行会議においても今議論が始まるころであります。家庭と学校の役割をまず明確にしてからいこうと大臣はおっしゃっていますが、この辺りがどのような形で役割を分担したうえでどのように推進していくか注目していきたいと思えます。

更に、これも新聞の情報ですが、自民党素案の方で、議員立法なのでしようが、「家庭教育支援法」をつくるということも報道されています。

既に家庭教育支援条例を作っているところもあります。さっき私が申し上げたように、どこまで行政が家庭の方に入っていくかという難しい問題はあろうかと思えます。内容をどのようにするかは大事なことだと思えますが、色々な動きがあるということも含めて、家庭教育あるいは地域との連携ということを大きな課題として、これからも検討していかなければならないと思っています。

以上です。

吉村知事

ありがとうございました。

今日は学力向上ということで、その中でも家庭教育の充実についてお話を伺ってまいりました。

私はやはり、学力は本当に大事ですけれども、総合的な人間力というものを育てていくというのが一番大きいことなのかなと思っています。

もちろん学力はその中のひとつですので、それも力を入れていかななくてはいけないということがあります。ただ勉強勉強で全ての学力が付くわけではなく、自然体験や社会体験、色々な体験をたくさんすること、それからスポーツや文化ということも大変大きな力になっていくと思います。相乗効果というものがあると思いますし、全てが成長の糧になると考えています。

それにしましても、学力は全国的な課題でもあり、また日本、世界の大きな課題でもあって、学校は学ぶところですので、これを抜きにしては考えられないわけなのですが、山形県の場合、昔から「知・徳・体」ということでやってきましたので、それはとても大事にしなければいけないことなんだろうなど。総合力というような人間力ということをしつかりと念頭に置きながら、学力向上にも取り組んでいってもらいたいと思っていますところ。

家庭教育支援法ということも今お話にありましたので、これから色々と中央の方も注視しながら、山形県でできることを教育委員会でしっかりと取り組んでいただけたらありがたいと思っていますところ。

本当に様々な視点から貴重な御意見をいただき、ありがとうございました。以上で協議終了しましたので、ここで座長の務めを終えさせていただきます。皆様御協力大変ありがとうございました。

閉 会

皆様お疲れ様でした。

以上を持ちまして第4回山形県総合教育会議を終了いたします。